

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁸⁰

イラクの戦場で生涯を全うしたジャーナリスト橋田信介

ベトナム戦争以降、世界各地の内戦や動乱などの取材を続けてきたベテラン戦場記者の橋田信介（61）と、NHKを辞めて戦場に飛び込んだ彼の甥の小川功太郎（33）が、イラクのバグダッド南方約30キロのマフムディーヤ付近で車で走行中に銃撃されて死亡したのは、04年5月27日夕方である。橋田氏がどのようなジャーナリストであったのか、残念なことに私はまだ彼の著作に一冊も目を通していない。今後目を通すことになると思うが、彼について書かれている追悼文や記事のなかからとりあえず、彼が著作『イラクの中心で、バカとさけぶ』で記している文章を次に拾ってみる。

《「命なんざー、使うときに、使わなけりゃー、意味がない」(中略)果たして、この戦争が命を捨てるのに「意味があるか、どうか？」》

《平和な日本では、自分は確かに生きているのだと実感することはむずかしい。(中略)でも戦場は違う。イヤというほど死ぬ目にあう。その極限状態が、逆に生きている実感を与えてくれる》

《人生は、ほとんどがつまらないもの。でも、時々こういう面白いことに遭遇する。だから、生きるのだ》

《もともと、ハシダは、戦場記者は戦争を語ってはならないという鉄則を持っていた。戦場記者は、「場」(戦場)から「況」(戦況)は語れるが、「争」(戦争)は語ってはいけないのだ》

《なぜなら「争」の原因は、すぐれて政治の世界であり「場」からは見えないからだ》

《戦争の開始はテーブルを挟んで決められる。ピカピカのテーブルの上と泥まみれの戦場は密接に結びついているが、その“次元”はまったく違うのだ》

《悲惨で怖い「戦場」に反対するのはバカでもできる。問題は「戦争」に反対することなのだ。それはすぐれて政治を語ることに尽きる》

《もうそろそろ、「戦争」と「戦場」をごっちゃにすることから卒業しなくてはならない。「戦場」の悲惨さを語るのは、単にそれは“泣き言”であることを悟らなければならない》

以上の記述の中には、ベトナムを始めとする各地の戦場に踏み入って取材してきた橋田氏の体験が込められているとして、戦争が戦場において目にみえるかたちをとってあらわれるからこそ、人々は目にみえる戦場のおぞましさ、残虐さを通して戦争に反対するのである。しかし、少なからぬ人々は目にみえぬ戦争に反対しているわけではなく、目に見える戦場に反対しているだけだ。戦場に反対しても戦争に反対していることにはならない。むしろ戦場に反対することで戦争を容認してしまうということが起こりうる。

目にみえる悲惨さに囚われているのだ。戦場の悲惨さを語って多くの人の情に訴えたところで、それは「泣き言」にすぎず、戦争が止んだためしはない。つまり、それは厭戦運動であって、反戦運動ではない。厭戦運動は戦争容認の裏返しにほかならず、反戦運動は戦場の悲惨さに反対するものではなく、戦場の悲惨さを生みだす戦争において問題の解決を図ろうとする政治に反対するものであるからだ。

私にみえてくる橋田信介が戦場に赴くのは、戦場の悲惨さを両目に焼きつけるためではない。そうではなく、どんなに悲惨な戦場であろうとも、兵士ではない人々（いや、本当は兵士も含めて）は、そのような戦場をも自分たちの暮らしの場所として生きている人々の現実に出会うために、おそらく彼は戦場に踏み入るのだ。彼に関心があるのは戦場における苛烈な戦闘行為ではなく、砲弾や銃弾が激しく飛び交っている現実の下で暮らしている人々の生活であると思う。戦場における人々の生活が劣悪であることをますますしいられていくそのなかに、彼は戦争の悪を見出し、戦争に反対する根拠を見出しているのが感じられる。たとえば、カメラマンの「不肖・宮嶋」氏は橋田氏たちが銃撃されることになるその当日の午前中、自衛隊のサマワ宿営地のプレスセンターで彼らと1ヵ月ぶりに再会し、言葉を交わした「慟哭の手記」（『週刊文春』04・6・10）のなかで、橋田氏についてこう書き留めている。

《ベトナム戦争の取材経験者が様々な理由をつけて早々に現場から遠ざかり、快適なオフィスで作家というホワイトカラーに転向したり、修羅場には無縁のテーマを撮り始めるが、橋田さんは数日前までカメラを担ぎ現場をはいずり回っていた。その姿勢は執念という言葉とはほど遠く、毎朝歯を磨くように淡々と、飄々と、飛び歩いておられた。》

あるいは、アメリカのイラク侵攻の3月末開戦初日にバグダッド入りして満室のパレスチナホテルを諦め、大統領宮殿近くのガラ空きのアル・マンスールホテルで宿泊した翌日、情報省前で「よう！」と手を挙げながら近づいてくる橋田氏と出会ったことを記している。《こんな状況でも、私のような顔見知りと会えて、ニコニコである。聞けば、私と同じホテルに泊まっているという。その夜、橋田さんの部屋を訪ねると、ステテコ姿で出迎えてくださった。部屋にはイヤジ臭が充満していた。》

これらの個所からはとりわけ、ジャーナリストというよりも、暮らしを転々としている生活人の匂いが漂ってくる。《毎朝歯を磨くように淡々と、飄々と、飛び歩》く姿は、戦場を生活の場としている風情であったし、ホテルの部屋での《イヤジ臭が充満してい》るステテコ姿こそは、戦場であろうと、どこであろうと、生活臭を滲み出している感があった。同じ『週刊文春』には、次のような妻幸子さんの追憶も掲載されている。

《橋田は、私の知る限り危険を察知する動物的な嗅覚が発達していて、決して無茶をするタイプではありませんでした。「静かだからといって安全だとは限らない。何か起こる前の静けさもあるんだ」と言っていましたね。カンボジアを取材中、殺気立った波尔・ポト兵に取り囲まれた時も、自分から地面に座り込んで「タバコどう？」なんて言い出すような人で、危険を切り抜けるのは上手な人だったと思います。》

コラムニストの勝谷誠彦も『月刊現代』(04・7)のなかで、同じエピソードを取り上げて、戦場ジャーナリストとしての橋田信介の目線について語っている。

《犯行の卑劣さは橋田さん独特の防衛術をも封じるものであった。私と橋田さんが出会ったのは、UNTAC統治下のカンボジアであった。『週刊文春』から派遣された記者として、功名心にはやる私を諭すように、この大先輩は語った。

「勝谷さんはさあ、背中そのへんに大マスコミっていう看板があって、そのせいでそっくりかえっているんだよ。俺はさあ、なにもないからさあ、こうやって前かがみで、よぼよぼやってるだろう。そうすると以外と撃たれないんだよ」

カンボジアだけでも何度も銃をつきつけられた橋田さんだが、いつもそれを切り抜ける秘術があった。

「相手がいろいろ言う前に、座っちゃうんだよ。そして、相手にも『まあ座れよ』って言うんだ。座ったらもうしめたもので、そこから先は絶対に撃たない」

まずこちらの目線を下げる。それに従い相手も下げると奇妙な連帯感が生まれ、殺さないというのである。

目線の低さは、橋田ジャーナリズムのすべてに共通する。戦争があり人が殺し合っている間、そこには生活があり人生がある。弾が飛び交う下で、人は飯を食い糞をし、そして交わる。橋田さんはそれを知り尽くしていた。弾の後ろから戦争を見るジャーナリストは多いが、橋田さんは弾の「下」から見たのである。弾が頭上を飛び交う場所、馬鹿同士が殺し合う、その真ん中で弾の腹を眺めて人々の営みを描くほど、戦争とそれに勤しむ連中を軽蔑した目線があるだろうか。》

《橋田さんはそれができる人であった》という。興味深いのは、《戦争があり人が殺し合っている間、そこには生活があり人生がある。弾が飛び交う下で、人は飯を食い糞をし、そして交わる》と書かれていることだ。《橋田さんはそれを知り尽くしていた》というが、一体なにを《知り尽くしていた》のだろう。戦争をしている間は、殺し合っている間は、人は自分が飯を食い糞をする存在であることを、そして相手が飯を食い糞をする存在であることを、忘れ去っているということをおそらく知り尽くしているのである。逆にいうと、戦い殺し合っている者同士にもお互いに《生活があり人生がある》ことを忘れ去ることによって、戦争が起こっていることを知り尽くしているということなのだ。しかしながら、人が戦争を惹き起こすのは、人が生活をかかえこんでいることに起因しているということも事実なのである。戦争とは武器をもって、一方の生活が他方の生活を滅却することであるからだ。

いずれにせよ、戦争をしている間は生活していることが忘れ去られている。忘れ去られていることにおいて、戦場には生活それ自体が存在していない。橋田氏はそこに生活感覚を持ち込むのである。《殺気立ったポル・ポト兵に取り囲まれた時も、自分から地面に座り込むのも、相手に生活感覚を喚び起こすためなのだ。人は誰でも飯を食い糞をするには、座らなくてはならないのである。「タバコどう？」と相手に勧めるのも、

まあ落ち着いて話し合おうじゃないか、ということだ。《まずこちらの目線を下げる》ということは、できるだけ双方の生活感覚に近づけるということである。つまり、生活には敵味方も存在しないし、だいいち国境など存在しないことを感覚的に示す必要があるのだ。橋田氏がジャーナリストとして「目線の低さ」をたえず備えて、上手に《危険を切り抜ける》ことができるのは、戦場で忘れられている生活感覚を漂わせながら、他の誰とも交流し合う意思を外にむかって開いていたからだと思われる。

橋田氏はおそらく砲弾が飛び交う悲惨な戦場でも、人々によって生活が営まれていることを発見したのである。戦場での生活の発見が彼を60歳過ぎてもなお、現場につながるまでとめていたと推測される。惨たらしい戦場であっても、非戦闘員である人々はどこにも行き場をもたずに、黙々と虫のように日々の暮らしを営んでいる。テレビ画面には雑草のようにたくましく生き抜いているように映しだされたり、必死に耐えている姿として伝わってくるのが感じられるが、けっしてそうではない。カメラ目線がそのように映しただけのことであり、戦場から遠く離れた我々がそのように受けとめたいから、そうみえてしまうのである。戦場で生きる人々は、砲弾の下を潜り抜けてしか生きられないからそうしているだけのことであり、どこであっても地に這いつくばるようにしてしか生きる以外に術をもたない人々の姿をたくましくみるのは、我々がそのようにみようとする感傷的な目線にすぎない。

橋田氏に悲惨な戦場で生きている人々の姿が見えるのは、彼もまた、自分の生活を置き去りにして戦場に踏み入っているわけではないからだ。彼の生活人的な目線が、当然のようにして戦場での生活を探り当てているとあってよい。彼のその目線は他方に、兵士たち戦闘員にすっぽり生活が抜け落ちていることをも見通していた筈だ。兵士たちが残虐になれるのは、自分が飯を食い糞をする存在であることの自覚が失われていくことと比例していることに気づいていた。兵士とはしたがって、生活が空洞になってしまった存在であり、その生活の空洞から弾丸がとめどなく発射されていくのだ。このことは逆に、生活が空洞になっていない兵士は戦場では役に立たないことを意味していた筈である。生活からはどんな銃弾も発射されることはなかったからだ。

橋田氏の「目線の低さ」は、戦場でも生活を営んでいる人々の姿を映しだしているだけではなかった。『Yomiuri Weekly』(04・6・27)には、次のようなエピソードが書き留められている。

《橋田さんはイラク入りの数日前、バンコクのアパートからの電話で、こう言っていた。「私が撮りたいのは、米軍の猛爆撃を受ける戦場に、どんな家があり、どんな人がいるか。どんな花が咲いていて、どんな虫が生きているかなんです」》

イラク入りしてからの現地情報を伝えるなかで、こんな会話も交わされている。

《「砂嵐と暑さのせいですかね。花は、道端に黄色い小さなタンポポがあったくらい。虫は見かけなかった。爆弾が落ちるたびに、驚き^{おび}怯えた鳥がバサバサッとすさまじい音をたてて飛び立つんですよ。ツグミやスズメ、そして白いハトを特に頻繁に見ましたね」

橋田さんがシリア経由でバグダッド入りしたのは、イラク戦争開戦直後の昨年3月21日朝だった。その夜は米軍の猛烈な空爆。滞在先のホテルのそばにも爆弾が落ち、部屋の窓から入った爆風で、体は壁にたたきつけられた。それでも橋田さんは、花や鳥を見ていたのだ。》

記述はこう続く。《戦場で真実を見すえ、平和の尊さを訴えてきた橋田さんは、爆風の中で見た白いハトについてこう言った。

「夜のバグダッドは、灯火管制のせいで真っ暗なのに、ハトはその白い色のせいで、ホテルのベランダからでもはっきりと見えました。だから平和のシンボルって言われるのかなあ」》

もちろん、タンポポや虫や、小鳥やハトを見るために戦場に赴いているわけではない。そして殊更草花や虫、鳥を探し回っているわけではないだろう。彼の「目線の低さ」にどんな人々がどんな暮らしをしているのかが飛び込んでくるように、草花や虫たちも彼の「目線の低さ」に飛び込んでくるのだ。見るのではない、見えてしまうのだ。戦場に踏み入って激しい戦闘場面を目撃しているのだけれども、彼の目線は人間の戦闘とは無関係にひっそりと道端で呼吸しているタンポポや虫や小鳥たちを捉えてしまうのである。つまり、それらの息遣いを感じてしまうのだ。人間が凄惨に殺し合っているなかでも人々の暮らしがあるように、草花や虫や小鳥も自分たちの自然のリズムを刻みながら呼吸しているのが、彼には感じられている。殺し合っている人間たちとは連帯できない代わりに、彼は自分の視界に入ってくる草花や虫との連帯を深く感じ取っていたのかもしれない。

いうまでもないことだが、橋田信介はジャーナリストである。そうである以上、「スクープ」とはどうしても切り離すことはできない。バグダッドで「白いハト」が頻繁に目に付いたとしても、「白いハト」が「スクープ」に直結しているわけではけっしてない。しかし、戦場でも「白いハト」が見えてしまう「目線の低さ」や視界の広がりや戦場に対する先入観や思い込みから自らを解き放ってくれることによって、自由な発想が「スクープ」を喚び込みやすくしているということはいえるだろう。そんな彼の姿も次の記述から「白いハト」と同じ比重で伝わってくる。

《イラクにどうしても行きたい。行かなきゃいけない。そう何度も何度も繰り返した。そんな彼の原点は、以前にも紹介した「世界的スクープ」だった。

1991年の湾岸戦争時、イラクが最新鋭戦闘機など100機以上をイラン領に退避させていた現場に潜入し、撮影に成功。その映像を見て、米軍を中心とする多国籍軍が、イラクへの地上攻撃を開始したとされる。

橋田さんはその時、イラク領内での取材を試みたが、かなわなかった。そして、米軍サイドが流すピンポイント爆撃の映像を見て、じだんだを踏んだ。

「テレビゲームのような無機的な映像からは、爆撃で死傷した人々の痛みが伝わってこない」

自らの「スクープ映像」についても、思い悩んだ。

「あの映像は、多国籍軍の攻撃を助けただけだったのではないか。ニュース報道としては、本質的な意味はなかったのではないか」

イラク入りしてからは、反米、親米などの先入観を一切排し、今度はサダム・フセイン政権側が、「米軍による民間人誤爆」について誇大宣伝していないか、と注意深く取材した。》

東大助教授の加藤陽子は『週刊現代』（04・7・3）で、橋田氏の著作『戦場特派員』を読み返しながら、優れたジャーナリストとしての彼の仕事を三点、指摘している。

《一つめは、ベトナム戦争において、南のサイゴンではなく、北のハノイから米軍の爆撃を記録し、それを世界に配信したことだろう。パリでベトナムに関する平和会談が開かれている頃のことだった。橋田は気づく。本当の戦争はパリでなされているのではないか、ここ北ベトナムは単なる戦場なのだ。全体状況の中で静かに戦場をみる橋田のスタイルはこうして確立した。

二つめは、'87年アブダビ発ソウル行き大韓航空858便が北朝鮮スパイ金賢姫によって爆破されたとされる事件に関する偉業によって記憶されている。事件直後から、墜落地点がタイ西方ジャングルであるかのように陽動したタイ陸軍やアメリカ海軍の動きを橋田は怪しんだ。そして、真の墜落地点はタイではなく、ビルマ（現ミャンマー）南方のアンダマン海の一点とにらむ。

なぜ隠そうとするのか。ならば、場所確定のため機体を海から引き揚げてしまえばよい。2年3ヵ月をかけた執念の調査の結果、見事この場所から機体を引き揚げたスクープ映像は、世界を震撼させた。なぜか。誤った地点に世間の目が集められている間に、本当の墜落地点から、ブラックボックスとボイスレコーダーが回収されてしまっていたのではないかと、との推測が成り立つからだ。

橋田は考える。この事件で得をしたものは誰か。明言は避けられているが、事件の翌年'88年に予定されていたオリンピックの南北合同開催が中止となり、韓国主催のオリンピックが成功した。この点は思い出されてよいだろう。》

三点目として列記されるのは、先に挙げた湾岸戦争時における「世界的スクープ」である。《「砂漠の嵐作戦」発動を躊躇していたアメリカの背中を、最終的に押すかたちとなった決定的映像を撮影したことによって世界に知られた。クウェート奪還のため、米軍を中心とする多国籍軍は地上からの侵攻を考慮していた。しかし、フセインが隣国イランに待機させていた120機のスホーイ戦闘機が存在がアメリカを躊躇させていた。イラクは迎撃を考えているのだろうか。橋田は、まさに問題となっている戦闘機の映像をフェンス越しに撮るといふ快挙を成し遂げ、その60秒あまりの映像はCNNなど世界のテレビメディアで放映された。

湾岸戦争の歴史には、この映像を分析することによって、イラン飛行場からイラク機が迎撃する可能性はないと判断し、「砂漠の嵐作戦」が発動されたと書かれている。ただ、ここで橋田の考察は終わらない。英米にとってイラク戦闘機のイラン退避の意味など前からわかっていたことなのだ。輿論を掻き立てるため、まさに自分の撮った映像が使われたのではないかと。》

ジャーナリストもまた、兵士たちとは異なるかたちで戦場でたたかっている者たちで

あることが、この指摘からよく伝わってくる。与えられた情報をそのまま鵜呑みにするのではなく、それらの情報をもう一度自分の頭で再構成しながら情報の虚偽を突き崩し、事態の真相に迫り暴いていくたたかいがジャーナリストに課せられているのだ。兵士たちが殺し合いのたたかいをし、非戦闘員である人々が飯を食い糞をする生きるためのたたかいを行っているなら、ジャーナリストは戦場で一体なにが行われているかを突きとめるたたかいを行っているのである。《全体をバランスよく見る眼、鋭い直感、この他に橋田が持っていた武器は、裏の裏まで見切る洞察力だったと思う。ならば、失明寸前の少年に日本で医療を受けさせる計画、自衛隊取材のための立ち入り証という、二重の「護符」を確保した上で、橋田が狙おうとしたより大きな対象は何であったのか。これが知りたい》と、加藤氏はいう。非常にヤバくなっているイラク入りの理由を問うているのだ。なにが狙いだったのか。今回の銃撃に関しては『週刊文春』(04・6・10)で、こう記述されている。

《橋田さんを知る多くの関係者にとっては、あまりにも意外な顛末^{てんまつ}だった。70年に日本電波ニュースに入社以来、ハノイ特派員、バンコク支局長、ローマ支局長を歴任し、ベトナム戦争では地上側からカメラを回したカメラマン。還暦を過ぎてなお、現場に立つ橋田さんには似つかわしくない悲劇だったからだ。

アジアプレス^{アジアプレス}の綿井健陽氏も意外に感じたという。

「橋田さんは基本的には慎重な人なんです。大ベテランにもかかわらず、他のメディアの部屋にも行っていつも情報収集をする。偉いなと思っていました。ところが橋田さん達の車がGMC(四輪駆動車)だと聞いたとき、『なぜ』と思いました。GMCは外国人の長距離移動の際によく使われていたため、明らかに標的になりやすく、人質事件以降はほとんど使われなくなっていた」

今回、橋田さんがイラク入りした目的は、モハマド君を日本に連れ帰り、治療するためだったと言われている。モハマド君は「沼津ローターアクトクラブ」の支援のもとで治療をする予定だが、そもそもは橋田さんがイラク入りする計画ではなかったという。

「バグダッドに留まっていた小川さんがアンマンなどに連れだし、バンコクにいる橋田さんが迎えに行く予定でした。ところがあるとき『やっぱり俺がバグダッドまで行った方が安上がりだから』と言って自分で行くことになったんです」(一杉真城・同委員長)

実は5月の連休明けにも「月刊ゲンダイ」編集部を訪れ、サマワの自衛隊宿营地取材のため身元保証人の依頼をしている。親しい関係者はそこに、橋田さんのもうひとつの顔を見る。

「モハマド君を連れてくるというのは単なる美談ではなく、橋田さんが長年ジャーナリストとして培ってきた一種冷徹な計算でもある。少年を助けるという行為で現地の人々の懐に入り、ディープな情報を入手しようとしたんでしょう。GMCを使ったのも、イザという時には逃げられる馬力があるからです。

そもそも根っからの戦場記者の彼がバグダッドを目前にして引き返すはずがない。きっと美談を使ってメディアから便宜を得ようとも考えたでしょう。でも、それは決して

悪いことではない。その冷静さがフリーランスには必要なんです」

しかしなお疑問は残る。実際に訪れたサマワでは、これといった取材はしていない。片道三時間半の危険な道を進んでまで、なぜサマワを訪れたのか。日刊ゲンダイの二木啓孝ニュース編集部長は、こう推測する。

「25日に小川さんが送信してきた原稿に『来週は橋田のサマワレポートです』と書き添えてあったので、とりあえず、取材証の確認に行ったのかと思いました。というのは4月に、橋田さんはサマワまで行ったのに取材許可が降りないことがあったんです」
昨年3月、イラクで共に取材した常岡浩介氏は言う。

「橋田さんはアル・マンスールホテルを拠点としていたが、ここは一番狙われるので戦争になってからは他のメディアが撤退したエリア。それでも『いちばんいい絵が撮れる』と残っていた。大手メディアがプレスツアーで取材するのを後目に、潜伏取材にこだわった」

橋田さんはイラク行きに関して「安全なら行かない。危険なら行く」と漏らしていた。だから敢えて危険なサマワを目指したのか。（略）

30年来の付き合いで橋田さんが戦友と呼んだカメラマンの鈴木幸男氏は「失敗しちゃったね。こんな形で終わるとは思わなかったよ」と真情を吐露した。》

文中の「モハマド君」とはファルージャでの戦闘に巻き込まれて左目を失明した少年であり、橋田氏は日本で手術を受けさせるために彼を連れ帰る予定であった。先の「不肖・宮嶋」氏には、「ガラにもないことしちまって……」と橋田氏は照れ笑いしてみせた。モハマド君については、「単なる美談ではなく、橋田さんが長年ジャーナリストとして培ってきた一種冷徹な計算でもある。少年を助けるという行為で現地の人々の懐に入り、ディープな情報を入手しようとしたんでしょう」という発言で想起されるのは、妻の幸子さんが橋田氏が殺害された4ヵ月後の9月に講演した際に、「もし、橋田信介さんが誘拐されていたとしたら、どうしましたか？」という質問に、やや間を置いて「モハマドを取引の材料に使おうと思ったでしょう」と答えたことである。《会場が一瞬静まり返ったような気がした。そんなことを言っているのだろうか》と、ジャーナリストの高瀬毅は『アエラ』(05・2・7)のなかで書いている。

橋田氏夫婦の仲人も努めた司会の山田寛は、《幸子のこの言葉に「とても感動した」といって、こう語る。

「なんだモハマドを利用しようとしていたのか、と誤解を受けかねないコメントだとは思いますが。でも真意はそうではなくて、フリーで仕事をしている夫を戦場に送り出す奥さんは、それだけ厳しい状態にあるということなんです。それがよくわかりました。いつも平気だと言いながら心配していたんだと。本音を隠せないのが幸子さんらしいなあ」

《最近の日本の新聞社やテレビ局は、戦争の最前線に記者を派遣することに慎重だ。もし何かあった場合、社の責任が問われるからだ。しかし、それでは戦争という政治はわかって戦争のことはわからない。信介はそこにこだわった。戦場という現場にしかオレの生きる道はないんだといわんばかりに。幸子も時には取材クルーの一員として、危

険な現場も踏んできた。一人息子の大介（２３）は、戦場取材に出向く前の信介が、ぴりぴりしていたことを思い出す。「どこかで戦争が始まりそうになると、いつもと様子が変わってくるんです」。ベトナム、カンボジア、ボスニア、パレスチナ、アフガン、イラク－。血で血を洗う地獄の戦場を何度取材しても、全身を突きさすような恐怖に慣れることはできない。戦場取材から帰ってきたあとは、無性にイライラした。戦場の凄まじさと、平和な現実との落差を身体と心が受けつけないのだ。幸子も同じことを経験している。》

夫が戦場にいる間は、日本にいる妻も同じ戦場にいる。戦場にいる夫が自分の取材のためにモハムド少年の治療という美談を生かそうとするなら、戦場とつながっている妻もまた、誘拐された夫のために「モハムドを取引の材料に使おう」とする、ということだ。妻は『婦人公論』（０４．７．２２）で、事件の“第一報”を聞いて、「信介は死んだ」と直感的に思ったことを語っている。

《思い出したのは９３年、カンボジアの内戦を取材中に彼が波尔・ポト派の兵士に拘束された時のこと。この時は「信介さんが捕まった」とジャーナリスト仲間から連絡が入りました。相手は１００万人を超える自国民を虐殺したといわれる組織。これは大変なことになったと周囲も大騒ぎでしたが、私は内心、命まで取られることはないだろうと感じていました。案の定、数時間後には本人から「解放のために金が必要だから、持ってきてほしい」という電話。お金を携えて、バンコクからカンボジアの国境まで届けると、無事に解放されました。

その後も危険な場所を選ぶようにして取材に出掛ける夫でしたが、私は周囲にも彼にも「橋田信介だけは何があっても死なないわよ」と話していたし、それは単なる冗談ではなかったつもりでした。でも、外務省の方の説明を聞きながら、今回は違う、と感じたのです。なぜなのか、それは今でもわかりません。

受話器を置くとすぐに頭に浮かんしたのは「信介を迎えに行く、現地に行かなくちゃ」ということ。「功太郎がケガをしたのなら、病院はどうしよう？ 日本に連れて帰って来ようか」などとも考えていました。夫の死に直面して思考停止になるとか、倒れるとか、そういう感覚はまったくなし。やっぱりどこかでこういう日が来るという覚悟だけは、できていたのでしょうか。》

なぜなのかわからないけれども、「今回はだめだ」と直感したのは、夫婦の間でのみ感じられるものがあつたからかもしれない。来たるべき日が来たという思いはこれまでの場合と同様に拘束されたのではなく、いきなり銃撃されたという情報を聞いて、夫が得意としていた危険の切り抜け方の巧みさを封じられてしまったところからやってきたのかもしれない。モハムド少年の目の治療を引き受けていたことや自分の後継者である甥と同行していたこと、還暦を過ぎて戦場記者からの引退も視野に入りはじめていたことなどが絡み合って、命を懸けた緊張感に夫が耐えられなくなりつつあることを妻は感じ取っていたのかもしれない。いずれにしろ、不運も重なって橋田信介は殺害された

が、彼だけでなく同行者の33歳の小川功太郎も殺害されたということを忘れてはならない。NHKを辞めて伯父と同行した小川氏は、最初にして最後となったルポ「ファルージャ突入記」(『現代』04・6)で、4月1日に起こる4人の軍事民間会社社員殺害事件の10日前のファルージャに踏み入って、イラク人たちの生の声取材している。

《この日の会議はいつもと様子が違っていた。なぜなら、米軍に逮捕された部族の男が昨日、5ヵ月ぶりに釈放されたからだ。

「サマーレコン(こんにちは)と口にしなが、30人の男一人一人と握手を交わし、末席に腰をおろす。そのわれわれの前に、灰色の民族衣装を着た一人の男が座った。この男がバグダッド中央刑務所から昨日釈放されたばかりのカリル(39歳)だった。

去年10月のある日、米軍が夜中に突然やってきて玄関を蹴破り家の中で銃を乱射し、身に覚えのない「テロ容疑」で訳もわからないまま逮捕されたのだという。そのときの米兵の乱射で生後7日の息子が死んだことを釈放された昨日初めて知った。こちらが質問をするより先に、カリルが口を開いた。

「刑務所では毎日殴られた。最低だった」

いかに刑務所内の環境が劣悪であるかということについて、大きな身振り手振りを交え、まるで演説のようにハイテンションでまくしたてる。人前で大声で話すことで自分の心の中にある悲しみや怒りの感情をかきたて、また発散しているようだ。バグダッドやラマディからも駆けつけた親戚の男たちは、時折舌打ちをしながら真剣な表情で聞き入っている。カリルの演説のリズムに身を委ねていると、アラビア語の意味はわからなくても、その言葉が帯びた怒りや憎しみが聞いている人々の心に伝播し、増幅してくる様がまるで目に見えるように感じられた。》

「サマワに自衛隊が来ていますが、賛成ですか？反対ですか？」と質問をぶつけると、
「日本人に恨みはないけど、アメリカのせいでいまは外国人はみな嫌いだ。早くこの国から出ていってくれ。なにもしないのに家は壊され、金も全部持っていかれて、子供も殺された。この俺の悲しみがわかるか？もしイラク人が日本で同じことしたら、あんたらどう思う？我慢できるか？」と、第二次大戦でアメリカにやつつけられた日本人なら、俺たちの苦しみがわかる筈だというように返してくる。

《村を出る手前に、壁に銃弾の跡が生々しく残っている民家が見える。最後にこの家を撮影しようと車を降りた。壁に残る無数の弾痕。黒く焼けただれた窓枠。戦車の轍、崩れた応接間の壁などを撮影していると、一人の青年が近づいてきた。この家には自分の叔父が住んでいたが、半年も帰ってこない。その米軍の攻撃で老女が2人死んだ。子供は怖がっていまも家から出られない、と淡々と説明した。

20歳だというこの青年の物静かな口調が逆に憎しみの深さを想起させる。冷めたように見える表情から、諦めというよりむしろ何かを決意した者のみが持ち得るある種の凄みが感じられた。眼光が鋭い。

「これがアメリカの民主主義だ」

青年が焼けただれた家を指差す。

「罪のない人間をたくさん殺しやがって、必ず米兵を殺してやる。殺して遺体を八つ裂きにしてやる。もしこの戦いで俺が殺られてもアラーの神様が天国に導いてくれる。俺は必ず殺るよ」

青年の目が暗く光った。レジスタンツが生まれた瞬間のように思えた。》

翌日も取材に行く予定だったが、同行したイラク人のハッサンから、「お前たちの車は町の人間にナンバーを控えられたという情報があるので、しばらく近づかないほうがいい」と告げられて諦め、《いまこの瞬間もファルージャでは憎悪が増幅している。その熱はイラク全土に広がっている。日本人もまた標的となることは誘拐事件などで証明された》と、二ヵ月後には自分たちが銃撃されて命を落とす運命になることを当然、気づかぬまま書きつけている。続けて高遠さんたちが解放された日に、その仲介をしたとされる「イスラム聖職者協会」のスポークスマン、モハメッド・バシャル師が小川氏にむかって、「今回の解放は日本国民への贈り物だが、日本政府への贈り物ではない」と語った言葉でルポを締め括っているが、では橋田氏と小川氏の殺害はどういう言葉で語られることになるのだろうか。 “今回の殺害は日本政府への贈り物だが、日本国民への贈り物ではない、”ということになるのだろうか、それとも……。

先の勝谷誠彦によれば、このルポには当初、編集部とのやりとりで削除された次の数行が付け加えられていたらしい。

《第二次大戦以降の世界の紛争地で、ここまで明確な政治的意志を持って日本人が狙われたことはなかった。今のイラクに滞在すること自体、無謀だという意見はあるだろう。批判は甘んじて受け入れる。しかし、なぜこんな事態になってしまったのか。今こそ逃げて考えるべきではないかと自分自身に言い聞かせながら、私はバグダッドに残っている。自衛隊員も外交官もN G Oもジャーナリストも、少しでもイラクの役に立ちたいという共通の思いの元に各々の「仕事」をしているのだと私は信じたい》

「なぜこんな事態になってしまったのか」。それを見つめ考えるために、彼は敢えてバグダッドの地に立った。もちろん、イラクから遠く離れた（今はまだ）安全な日本で、そのことを考えることはできる。しかし、それでは見えてこないものが膨大にある。「現場」に踏み入れることによってしか、見えてこないものがある。血を流しつづけている「現場」について考えるのに、自分は一滴の血も流さずに済ますことができるものなのか。危険な「現場」を取材するのに、自分は危険な目に遭うことを避けることができるものなのか。「考える」ということが自足行為にとどまらないとすれば、同じ「危険」をかかえこむところまで近づくことではないのか。さまざまな自問を育みながら、彼はNHKから飛び出して「現場」を目指した。ホントに最初の一步だった。この点が橋田信介と全く違った。「なぜこんな事態になってしまったのか」を考えるために足を踏み入れた彼は、いきなり地雷に触れて「なぜこんな事態になってしまったのか」を身をもって、我々の前に突き出すことになってしまった。

2005年5月21日記

